彼女の本棚

目的や楽しみの為に生きるのか、
それとも生きる為に目的や楽しみを
見つけるのか。

葉山ユタ

居間では夫と娘がテレビのクイズ番組を見ている。
私は一人、台所で洗い物だ。

中学生の娘が、あまりにもクイズの答えが分からないので、夫がもっと本を読めとたしなめている。
そう言う夫も、本と言えばビジネス関連の本しか読まないのだが。

公団住宅の我が家の書棚は貧弱だ。親子三人で三段のカラーボックスを二つ、本棚として使っている。中身も寂しく、娘の漫画と子供の頃読み聞かせた絵本と児童書、そして夫のビジネス書、私の料理本程度しか入っていない。
小説はほとんど無い。時折、市の図書館で借りて読むくらいだ。週四日パートで働いて家事をこなしていたら、本をゆっくり読む時間なんて無いのだもの。

大人になって働くようになったら、好きなだけ本を買って読めると思っていたのに、結婚した途端に趣味も本も私の日常からするするとこぼれて消えていった。
その代わり手に入れたものも沢山有るし、今の生活に不満も無いけれど、この殺風景なカラーボックスの本棚を見るたびに、自分の中の大切なものをおざなりにしてきた事に気付かされて、胸の奥がチクリと痛くなり、妙な焦燥感にイライラするのだ。

数年前までは実家に帰れば、私が学生時代に溜め込んだ本が山ほど有ったのだが、兄夫婦が実家に同居を決めた時、母が場所ふさぎだからと全て処分してしまった。

娘が台所の私に、クイズの答えを聞いてきたが、湯沸かし器の音にかき消されて良く聞こえなかった。
「え？なんて言ったの？」
「もう！お母さんも、もっと本を読めば」
娘がむくれた口ぶりで言い捨てると、またテレビに向き直った。

思わずカチンと来る。
私がこの子くらいの時には、週に二、三冊は学校の図書館から借りた本を読んでいたのだ。
デュマ、ニーチェ、筒井康隆、ハインライン、ヘッセ、モンゴメリー、夢中になった作家は数知れず。

夫と娘がテレビの前でけたたましく笑っている。

私の本、もう取り戻せないんだろうな。
水道のコックを閉め、手を拭いて台所の灯りを消した。

パートの仕事は朝十時から午後三時までだ。
家の近くの小さな会社で、簡単な事務をしている。面倒なことや時間のかかる仕事は社員さんがやるので、私がやるのは本当に雑用と言ってもいいような簡単な内容だ。高校生のバイトでも務まるんじゃないだろうか。

短大を卒業して三年ほど一般企業で OL をし、寿退社した後すぐに娘が生まれ、その後長い間専業主婦だった私には、今更世間の荒波に揉まれて正社員のポストを手に入れようなどという向上心は無い。それに、IT 化し続けスピードと効率を要求される能力主義には付いて行けそうにないので、これでいいや、とも思っている。

今日は一日、伝票整理と顧客データの入力で終わった。
簡単で誰でも出来る仕事だから、当然時給も安い。それでも自分の銀行口座に月に一度印字される給料の数字を見ると、家計の足しだから無駄使い出来ないと思いつつも気分が高揚する。
扶養範囲を超えないように、労働時間を計算しつつ働くのは妙なものだけど。

三時丁度に仕事を終え、帰宅途中に天気も良いのでデパートの物産展に寄ってみた。
たまにこういう所に寄って、名産品のお菓子などを買うのがささやかな楽しみなのだ。
金沢の物産展は女性客で大賑わいだった。
会場内は人いきれと暖房でひどく暑く、厚い冬物のコートを着ている為、首筋や顔から汗が吹き出してくる。色々な食べ物の匂いと、飛び交う客引きの声が混然一体となって、いつもの事ながらお祭りのようだ。
暑さと人ごみに堪らなくなり、人の流れに逆行して化粧室に逃げ込んだ。

まったく、暑いったらないわ。
首に巻いたマフラーを取りバッグにしまい、化粧室の鏡に映った自分の顔を見てギョッとした。
頬と鼻の頭のファウンデーションがはげて、顔の色がまだらになっている。なんて疲れた顔をしているんだろう…。

誰もいない化粧室でため息をつき、バッグから化粧道具を出してファウンデーションを塗り直した。これと言って疲れるような事をしているわけでもないのに、どうしてこんなに疲れた顔をしているんだろう。
ああ、老けただけなんだろうか。まだ四十にもなっていないのにな。

大袈裟かもしれないが、こんな気分の時考える事がある。
自分は何の為に生きているんだろう。人生に目的を持って生きている人って、一体どれくらいいるんだろう、と。

鏡の中の火照った頬の赤みを見つめていると、化粧室に年配の女性の二人連れが入って来たので、私は手早くルージュを引いて化粧道具をしまい化粧室から出た。
何だかもう物産展の賑わいの中に戻る気がしない。

エスカレーターで一階下に降りると、そこは宝飾品と家具のフロアーだ。
先程の喧騒とは別世界の静かで落ち着いた空間で、落ち着いた年代の男女の店員が背筋をしゃんと伸ばして、来るかもしれない客の為に穏やかな微笑を浮かべて立っている。
暗めの照明の下、宝飾カウンターでは若い男女の客がペアの指輪を選んでいるが、他に客はいないようだ。

こういう所の店員さんて、退屈じゃないのかしら。
先程の頬の火照りを冷ます為にも、この静かな空間をブラブラしてみたくなった。
縁の無い場所だけど、あのにこやかなマネキンの様な店員さん達は、私がただ見ているだけだからって邪険に扱う事もないでしょう。

宝飾カウンターは、流石に冷やかしで眺める気にはならないので、奥の方にある家具売り場に行ってみる。
豪華な輸入家具や絨毯が並んでいるフロアーも、今の私の生活には全く縁のない場所ではあるけれど、宝石よりはまだ身近に感じられるわ。

チーク材かオーク材か分からないが、デコラティブな濃い茶色の艶やかな家具が目を引いた。猫足の家具はよっぽど家が素敵じゃないと収まりが悪いわよね。コーディネイトも難しいし。

小ぶりで素敵なライティングデスクが気に入り、ちょっと覗き込んで値札を確認してみたら、私のパート代の五ヶ月分もしたので、ああ、そんなものよね、と残念な納得をした。
ウチの家具は、組み立て家具か、輸入物は輸入物だけど、東南アジアあたりからの輸入物だもの。

私がシゲシゲ家具を覗き込んでいても、数メートル先のカウンターで書類整理に忙しい年配の女性店員は、下を向いたままこちらには見向きもしない。
どうせ何も買わないだろうと放っておかれているんだろうけど、その方が気兼ねなく眺められて有り難いわ。

落ち着いた空間に、豪華な家具調度品。まるで美術館で芸術作品を見ているみたい。眼福、眼福。
ちょっと前まで、化粧室で軽い絶望感に沈んでいた気持ちが、徐々に軽く明るくなってきた。

ダークな色合いの高級家具の次に並んでいるのは、白で統一された、もう少しカジュアルな形の木製家具だった。
白は汚れが目立つけど、部屋が広く見えるからいいのよね。他の家具とも合わせやすいし収まりがいい。
カップボードやチェストと一緒に、自分の背丈と同じくらいの高さの書棚が並んでいた。

白い塗装で、ガラスの観音開きの扉。下の方には引き出しが二つ付いており、書棚の上も飾り棚として使えるように、飾り縁と美しくウェーブを付けた背板が付いている。扉の取っ手や金具類は、アンティーク調に仕上げた渋い色の金属製だ。

あら、可愛い。
ガラスの扉が付いた書棚は少女の頃からの憧れだった。
実家で使っていたのは、書棚と言うより単なるスチール棚で、量さえ収まればいいだけの無骨なシロモノだった。
そして今は三段カラーボックスだもの。
こんな可愛い書棚は、若い女性の一人暮らしか新婚家庭なら似合うかもね。洋書とか並べたい感じ。

値段を見ると、先程の高級家具よりは大分安く、パート代の二ヶ月半分くらいで買える値段だった。
買えないわけじゃないけれど、私の本棚じゃなくてウチの本棚って事になるんだもんねぇ。漫画しか読まない娘に買うには勿体無いしな。

ふと腕時計を見ると、もう四時を過ぎていた。そろそろ帰って夕飯の支度をしないと。私は家具売り場を後にして地下一階の食品売り場に下り、いくらか食材を買って帰宅した。

五時前には家に着いたが、ドアを開けてくれた帰宅部の娘は、お母さん遅いー！と開口一番文句を言った。

「仕方ないでしょ、仕事の後に買い物してきたんだから。あんた、中学生にもなってまだ一人で留守番出来ないの？」
「一人で居ると、誰か来た時困るんだもん。さっきも薬の勧誘の人が来たよ」
「薬の勧誘？」
「なんか、家に置いて下さいとか何とか」
「ああ、置き薬の勧誘」

「なんか、そんなの。お母さんいないから分かりませんって断った」
「そう。チェーンかけてた？」
「かけてた。営業の電話とかも来るし嫌になっちゃう」
「ナンバーディスプレイ見て、知らない番号なら出なくていいのよ」
「電話鳴るとびっくりするもん」

帰宅すると、いつも娘がまとわりついて機関銃のように話しかけてくる。十四歳は危険な年頃とは言うが、この子は少し子供っぽい。この後夫が帰ってくると、今度は私にすげなく当たり、夫にまとわりついてあれこれお喋りを聞かせるのだ。娘と夫は、性格が似ている。ちょっとアゴを付き出して勢い良く話す動作も似ている。

着替えて台所に行くと、娘は居間のソファに寝転がって漫画を読んでいた。
その娘の足がブラブラしている所に、例の黒い三段ボックスが二つ並んでいる。漫画やアニメが好きなら、本も好きになって良さそうなものなのにと思うが、彼女が本を読むのは、学校の課題で読書感想文を書かなければならない時くらいだ。どうしてなのかしらねぇ。コバルトでもいいから読めばいいのに。

夕食の支度をしていると、夫がただいまと声を掛け帰ってきた。公務員で事務職の夫は、判で捺したように同じ時間に帰宅する、今時珍しい勤め人だ。彼も時間が有る時はテレビを見ているか、自分のパソコンでネットを見ているようで、本を読むことは稀だ。時々アマゾンからビジネス関連の本を買って読んでいるが、新聞もメインの記事だけ読んで、連載されている小説などは一度も読んだことがないらしい。

夫とは、お互い学生の頃からの付き合いで、その当時に何度か彼の部屋に遊びに行ったが、部屋にはこれと言った本棚らしきものは無く、勉強用の机の上に無造作に専門書が積まれているだけだった。どんな本を読んでいるか知りたくて楽しみにして行ったのに、何にも無くがっかりした覚えがある。

理系だからかしらねぇ。娘も父親に似たのかしら。でもあの子、理系が得意ってわけでもないのよねぇ。
ピーラーでじゃがいもの皮を剥き、芽をえぐりだしながら考える。今日のメインはホワイトシチューなのだ。料理の手順と、本好きの DNA について交互に考えながら手を動かす。

本を読むとか読まないとか、何でこんな事に拘っているのかしら、私。どうだっていい事だろうに。
今日の午後、デパートの化粧室で感じた小さな刺の様な絶望感が、またチラチラと頭の隅から湧き上がり、次第に小さな塊になって喉の奥に下りて来た。

私は何の為に生きているんだろう…。

居間で漫画を読んでいる娘とテレビを見ている夫の方をチラリと見る。夫に問いかければ、きっと娘を育て上げる為と言うだろう。では、それが終わったら？それがなかったら？結婚していなかったら？

若い時はこんな事は考えなかった。毎日が忙しすぎたり、楽しかったり、怒りに駆られたり、次から次に何かが起こって、そんな事を考えている暇がなかった。
この歳になって初めて、このまま何となく日に日を継いで生きるだけでいいのだろうか、と考えるようになったのだ。
生活が落ち着いて変化が減ったとすれば、それはそれで幸せという事なのに、一方でこんな辛気臭い事を考えるようになるなんて。

鍋に油を引いて一口大に切った鶏肉を炒め、続いて野菜類も入れて炒める。焦がさないように軽く炒めてから白ワインを入れると、ジューッと油が跳ねる音がする。ワインの香りがフワリと台所に広がった。

結局人間が生きると言う事に、これと言った意味なんて無いと思う。
「生きる」と言う事に、ささやかでもいいから何らかの意味付けをしたがるのは、頼りない身の自分の日常に、その行先の目当てを求めるからではないのか。

真っ平らのだだっ広い平原に一人ぽつんと立っていたら、何かしら眼に入る物を目指して歩き出すのが人間の本能というものだろう。何も視野に入る物が無かったら、その立っている場所をウロウロするばかりで、どこにも行けないかもしれない。

シチューはこのまましばらく煮こむとして、あとサラダを作らなきゃ。

今日はパートの日なので、朝食の洗い物もそこそこにして家を出た。

会社自体は朝九時からの営業だが、パート職は十時からの始業になっている。パートは私を含めて女性三人で、シフトを組んで交代で勤務していて、みんな同年代で家族構成も似ているせいか、話も合い結構仲良くやっている。
今日は私だけが出勤で、他の二人はお休みのはず。社員の女性は、年配の女性が経理に一人、総務と一般事務に一人ずつ三十代の女性がいて、他の社員はみな男性だ。

長い事新入社員は採用していないようで、数人いる営業マンの最若手は三十六歳という、少し年齢層の高い会社なのだが、その方が私には馴染み易くてありがたい。

パート職には決まったデスクが与えられず、出勤したスタッフが二つのデスクを共有で使う事になっている。
文房具や事務用品は「お道具箱」と呼ばれる事務用の紙箱にそれぞれ名前を書いて収納し、出勤したらそれを出して仕事をし、退社時には、また全てその箱に収納して片付けて帰るのだ。
私は自分のお道具箱には名前しか書いていないが、他の二人はシールやイラストで派手に飾って、何だか子供のおもちゃ箱のようになっている。
出勤して自分のお道具箱を出し、デスクに置かれている連絡ノートを読んでいると、上司の課長から声を掛けられた。

「宮川さん、仕事は後でいいから、ちょっと来てくれるかな。相談があるので…」
そう言って会議室の方へ手招きするので、はいと返事をして席を立った。

会議室の応接ソファに腰掛けた課長が、テーブルを挟んだ椅子に掛けるように手で促した。
くたびれたグレーのスーツを着て、痩せた顔色の悪い五十代半ばのこの課長は、いつも人の目を見ないように俯き加減で話すのがくせだ。顔を見るたびに、どこか内蔵が悪いのではないかと思う。

「何か…？」
「うん、宮川さん、ここに勤めて二年くらいになるかな？」
「そうですね。来月で丸二年になります」
「真面目に働いている人に言いづらいんだけどねぇ、この不況でしょう？ウチの会社も結構厳しくてねぇ…」

…ああ、嫌な感じがする。私は無言のまま頷いた。

「今の契約って三ヶ月更新だから、あれでしょ？来月で契約が一区切り付くでしょ？それでねぇ、大変申し訳無いんだけど、次のパート職の更新は出来ないって、社長から指示が出たんだよねぇ…」

私は心臓が少しドキドキし始めたが、契約更新の時期が近づく度に、今回は大丈夫だったねとパート仲間と話していた事もあり、雇い止めの話自体にはそれほど驚きはしなかった。
ただ、その時が実際に来ると、正直、平静ではいられない。

「え？と言う事は、来月で三人とも解雇ですか？」
思わず出た言葉が、冷ややかで刺々しい。
「まぁ、解雇と言うより来月一杯で契約満了って事だよね。雇用保険はすぐ受け取れるようにするから、突然で本当に申し訳ないけれど飲んで下さい」
課長は深々と頭を下げた。
「でも三人いっぺんにいなくなったら業務に支障が出ませんか？シフトを減らして、それぞれ働けるように出来ないのでしょうか？」
私は無駄だと思いながらも食い下がってみた。物分りよく、はいそうですかと引っ込むのは悔しい。

「来月、地方の営業所から転勤で、女性スタッフが一人来る事になっているんだよ。その人が引き継ぐ事になると思う。あと、新卒を営業も含めて何人か採る予定なんだ。ほら、この会社、どんどん高齢化しているだろ？少し若いの入れて、仕事を教えて行く必要があるんだな。離職についての手続きとか詳細は、後日総務の方から説明するから。本当に悪いね。勘弁してね。」
課長は、じゃそう言う事だから、と席を立って出て行った。

何の返事も出来ないまま、一拍遅れて私もゆっくり席を立った。結局、社員の人件費を捻出する為にパートを切るわけだ。
どうにも人生と言うものは、望む変化はそうそうは起きないのに、望まない変化は突然やってくるものだ。
今日の仕事のモチベーションは、もうすっかりゼロになった。

週末、土曜日の午後にパート仲間三人でお茶を飲みに集まる事にした。まぁ、会社の悪口大会になる事は分かっているが、たまに愚痴を言うくらいは許されるだろう。
最寄り駅の近くに在るファミレスは、土曜の午後の割には空いていて、三人で隅っこの窓際席に陣取った。

一番年上の京子さんは今年四十二歳、高校生の娘さんが一人いるバツイチの女性だ。年金暮らしのご両親と実家で暮らしているので、そんなに生活に困っている訳ではないようだが、やはり今回の雇い止めにはがっかりしている。
もう一人は華恵さん。私より二つ年下の三十六歳で、中学生の女の子と小学生の男の子のお母さんだ。三人の中では一番バイタリティが有り、もう一つのパートを掛け持ちして働いている。旦那さんが家でネットの仕事を自営でやっているそうだが、結構大変なのだと思う。

三人でケーキを食べながら、参っちゃうよねぇ、とひとしきり愚痴った。京子さんは丁度いい機会だから、退職したら少し家族サービスの為に時間を使いたいと言っていた。

「こないだ娘と大げんかしたのよ。今まで母親らしいこと何にもしてくれなかったとか、お弁当のおかずが冷食ばかりで悲しいとか、大泣きされて参っちゃったわ。お弁当作ってあげてるだけでも感謝してもらいたいところなのに。まぁ両親にも世話になってるし、一度みんなで温泉でも行こうかと思って」

「ああ、いいですねぇ。あたしはもう一つの仕事も有るし、また何か短時間パートでも探そうかな」
「ハナちゃん、子供に料理、ちゃんと作ってる？作った方がいいわよ。食べ物の恨みって怖いって言うけど、ホントよ」
「ウチは旦那がやってるから大丈夫です。料理するの大好きなんだって」
「いいなー、ウチの旦那、毎日定時で帰って来るけど、家の事なんてやった事無いわ」
「宮川さん、どうします？仕事探すなら私のパート先紹介しましょうか？販売だから立ち仕事だけど」

う～ん、どうしようかな、と私は言葉を濁した。
私の場合は、彼女たちのように生活がかかっているわけではなく、あくまで家計の足しと、娘や夫婦の将来の為の貯金が目的なので、何が何でも働かなくてはならない状況ではない。「働く」事に対する姿勢がぬるいのだ。

「失業給付金も出るって言うから、貰いながら少し考えようかな」
そうね、それもいいかもね、と京子さんが応えた。

「たまに何の為に生きてるんだろうって思うこと有るのよ、最近」
「ええ～？大丈夫ですか宮川さん。いつもテキパキして元気なのに」
「あ～、私解るわ、それ。もう、何にもしたくなくなる事有るよね。ご飯の支度してても何にも食べたくないし、テレビも見たくないし、人と話すのも嫌な時」

「欝っぽいって事ですか？」
「そこまでのものじゃないんじゃない？多分、飽きてるんじゃない？違う？」
「そうかも…。生活に飽きるのかな。贅沢なのかもしれないけど」
「宮ちゃん、いい子っぽいもんね。あんまり我慢しちゃダメよ」
「特に我慢もしてないかなぁと思うんですけど…」

「真面目な人は自分でも気付かないうちに遠慮して、色々我慢しちゃうもんなのよ。それが積もり積もって耐えられなくなるんだわ。家庭で我慢し、職場で我慢してるうちに、このままずっとこうなのかなって、生きる事が虚しくなるのよねぇ。」
「京子さん、今、遠い目してますよ」
京子さんがハナちゃんを殴る振りをして、二人でイヒヒヒヒと笑っている。

「そんな事も有るのよ、長く生きてると。宮ちゃん、何か楽しみ見つけなさいよ」
「楽しみですか？」
「生きがいでも目標でも、言い方は何でもいいけどね。家族や仕事と関係ない自分の楽しみよ。趣味に使えるくらいのお金はひねり出せるでしょ？」
「そうですねぇ、私の趣味は読書くらいなので、お金はあんまりかからないです。図書館で借りてるし」
「はぁ、あたし図書館って高校卒業してから一度も行ったこと無いです」
「ハナちゃんの趣味は金儲けでしょ」
「いや～、ひどい！全然儲けてませんって。こないだ旦那に薦められて買った株も大暴落でした」
京子さんと私は、ハナちゃんの童顔の丸顔を見つめて大笑いした。

目的や楽しみの為に生きるのか、それとも生きる為に目的や楽しみを見つけるのか。
「卵が先か鶏が先か」と良く似た謎かけだ。

三時間ほどお喋りして地下鉄駅で解散した。二人と話して、今日は久しぶりに気分が晴れた。
地下鉄のシートに腰を下ろし、京子さんの言っていた「楽しみ」について考えてみる。

楽しみかぁ、何か資格の取れる勉強するとか？これは楽しみじゃないな。強いて言えば目的だけど、それこそ目標有っての資格よね。それじゃ旅行とか？一人で行くには気が引けるし、家族みんなで行くとなると逆にストレス。

う～ん、本かなぁ。ああ、書棚？でも、買ったらそれっきりの物で、楽しみとは違うんじゃない？でも家に有ったら素敵かも、あの白いデコラティブな書棚。

家に有るのは、結婚を決めた時、転勤が多いからと言われて選んだ安価な組み立て家具ばかり。考えてみれば、あの時少しくらいお金を掛けても質の良い家具を揃えれば良かったのだ。
結局、転勤は娘が三歳の時に一度あったきりで、その後は今の住まいに長い事落ち着いている。
あれが我慢って言えば我慢だったのかなぁ。今更言ってもしょうがないけど。

終点まで乗っていれば良いので、シートに深く腰掛け目を瞑って考える。暖房が効いてて心地良い。
来月一杯働けるって事は、再来月までお給料が出て…それから失業給付金…って幾らくらい貰えるんだろう…。
実は、家族にはまだ退職の件は話していない。心配されるのもからかわれるのも嫌だし、あっ、そう、と流されるのも何だか嫌だからだ。

悶々と考えていると、バッグの中の携帯がブルブルと震えて止まった。メールかな。
携帯を開いて見ると京子さんからメールが届いていた。人目を気にして、バッグの中から携帯を出さないようにこっそり読んでみると、件名も無く短いメールだ。

「思い切ってスゴイ本買っちゃえば？」
スゴイ本？スゴイ本って何だろう？

でもその言葉は、私の胸の中にぽっと小さく、それは小さな豆電球ほどの明かりとなって暖かく輝きだした。

その晩、夕食が済んで家族でテレビを見ている時、仕事を辞めなければならない事を夫に話したのだが、案の定あまり驚いた様子もなかった。

「不景気だからなぁ。それに企業が若者を雇用したいって気持ちも解るよ。俺達の年金も若者に払って貰わなきゃならないし。まぁ、しばらくのんびりすれば？条件に拘らなきゃ何かしらパートの仕事は有るだろうし、あんまり無理して働かなくてもいいよ」

彼はお金については割と無頓着な人で、貯金にはあまり興味が無く、持ち家願望もないらしい。私が娘に手が掛からなくなったから働きたいと言った時も別に反対はしなかったが、フルタイムはちょっと困るなぁと言っていた。
贅沢な生活やマイホームより、慎ましくとも妻が料理したご飯を家族揃って食べるのが、彼の理想の家庭なのかもしれない。

娘は、ふ〜ん、そうなんだと言った後、もう働かないの？と少し遠慮がちに聞いてきた。やはり学校から帰って来た時に、家に誰もいないのは心許ないのかもしれない。
「そうねぇ、まだ分からないけど。お母さん、ちょっと習いたい事が有るから、それと合わせて考えてみるわ」
「習いたい事って何？」
「決まったら教えるー。大丈夫よ、そんなにお金がかかったり、毎日出かけたりはしないから」
娘はちょっと唇を付き出して不満げだったけど、生意気な口調で、じゃあ好きにすればぁと言ってテレビのリモコンを手に取り、チャンネルを変えた。

そして、パートの仕事を辞める頃、宣言通り私はある習い事を始めた。
習ったからと言って資格になるわけではないが、私は装丁と製本を教えてくれる個人教室を探し当て、週に一度通っているのだ。
夫はそんな事を教えてくれる所が有るのかと少し驚き、娘は何が楽しいのか分からないと呆れている。
私は「スゴイ本」を買うより、「スゴイ本」を作ってみたいと思ったのだ。

ある日の午後、ダイニングテーブルに装丁用に選んできた和柄の古布を広げて裏打ちの準備をしていると、娘が学校から帰って来た。

「また表紙作ってるの？」
「うん。古本屋で買ってきた古典の表紙を変えてみようと思って。ああ、お腹空いてたらベーグルが有るよ」
ベーグルかぁと若干不満そうにつぶやいていたが、自分の部屋で着替えた後、真っ直ぐ台所に行ってマグカップに牛乳を注ぎ、口にベーグルをくわえて私の側へやって来た。

「ベーグル、硬くてあごが疲れる。もっと甘いパン買ってきて」
私の向かいに座って口をもぐもぐさせている娘は、何だか小型の草食動物のようだ。片手を伸ばして、元々の表紙を剥がされた本の中身をパラパラとめくっている。

「古典って何？…更級日記！こんなの読む人いるのかな」
「いるでしょ。好きな人は好きなのよ」
「うへぇ、わっかんない」

娘は牛乳でベーグルを流しこむように食べてからソファに移動した。横座りしている彼女の隣に例のカラーボックスが並んでいる。ただ、その中身は以前と違って小説やハードカバーの本が増えた。

娘の漫画や昔の絵本は、彼女の部屋に引きとってもらい、私が装丁を気に入って買った本や教室で表紙を作った本、これから表紙を剥がされる練習用の古本が並んでいるのだ。
私がこの習い事を始めてからあっと言う間に本が増え、二つのカラーボックスの容量はそろそろ一杯になりかけている。

息を詰めて布の裏打ちを終え、ほっと息を吐いて椅子に腰を下ろした。装丁の工程は手間もかかるし、気も使う。何より丁寧でなければならない。ふと娘の方を見ると、何とカラーボックスの中から私の本を出して読んでいるではないか。
まぁ、あの子ったら浅田次郎読んでるわ…。ちょっと早くないかしら。

夕食の準備の為、一旦道具類を全部片付けた。片付ける箱は例の「お道具箱」だ。会社を辞める時に記念に貰ってきたのだが、箱のフタの裏に京子さんとハナちゃんのメッセージが書いてある。ハナちゃんの自画像が面白くて、これを見るといつも顔が緩んでしまう。たまに彼女達からメールが来るが、元気にしているようで嬉しい。

私は晩ご飯の準備を始めたが、娘はテレビをつけずにずっと本を読んでいたようだった。いつもの様に夫が定時に帰宅すると、何だか静かだと思ったらテレビがついていないのかと、ぶつぶつ言いながらテレビをつけたが、それでも彼女は顔も上げずに本を読んでいた。私は味噌汁の味見をしながら、思わずほくそ笑んでしまった。そうよ、あの子の DNA は半分私から出来てるのよ。

夜十時を過ぎた頃お風呂から上がった娘は、パジャマ姿で片手に浅田次郎を持って自分の部屋に入って行った。どうやらお気に召したらしい。私がカラーボックスの中の本の配置を変えていると、いつの間にか片手にマグカップを持った夫が後ろに立っていた。

「そこに立たれると手元が暗いんだけど」
ああ、そうかと慌てて夫が脇にずれる。
「そのカラーボックス、もう限界じゃない？前から思ってたんだけど、本棚買ったらどうかな？」
「え？そうなの？本棚買っていいの？」
夫に思ってもいなかった提案をされて、私の顔は喜びに輝いたと思う。
「いいしょ、それくらい。ニトリでもイケアでも行って来いよ」
「…ああ…まぁね。そうね。沢山収納出来る、スライド式の本棚でも買おうかな」
私の顔の輝きは、大分照度が落ちたことだろう。

「学生の一人暮らしみたいに、いつまでもカラーボックスってのもなぁ。ちゃんとしたの買えよ。お前の貯金からじゃなくていいから。このカラーボックスは佳奈にでも使わせればいいだろ」
すると、たまたま自分の部屋から居間に出てきた娘の佳奈が、アゴを付き出して大きな声で言った。
「あたし、カラーボックスの本棚なんて嫌だぁ。どうせならちゃんとしたの買ってよ」
「あんた、本棚なんか欲しいの？本、読まないじゃないの」

娘はちょっと恥ずかしそうな顔をしたが、これから読むようになるもん、きっと、と口の中でモゴモゴ言った。
「居間に置いてみんなで使おうよ。どうせならカントリー風の木の本棚がいいんだけど…」
意外な娘の言葉とその様子に、私と夫は吹き出してしまった。

「分かったわ。日曜日にでもみんなで家具屋さんに見に行こうよ。この際ちょっと奮発してかっこいい本棚買おう。何なら、お母さんの貯金出すから」
「そうだな、せっかくだから一寸贅沢するか。佳奈とお母さんの本棚って事で」
やった！と娘がはしゃいでいる。どんな本棚がいいだろうか。あの白い可愛らしい本棚はどうだろう。
今となっては本棚よりもその中身の方が大事だけれど、でもやはり本棚は欲しい。佳奈と二人でお洒落な本棚を使うのは悪くない。

夫が娘をからかっている様子を見ながら、二三ヶ月前に感じた絶望が嘘のようだと思った。ああいう暗いトンネルの中を歩いている様な気分って、きっと誰でも感じる事が有るのだと思う。そして何かの切っ掛けでふっと世界が明るくなり、いつの間にか色鮮やかな風景を見るようになっている。
あそこが分岐点で、あそこから上に行くか下に行くか、本当にほんのちょっとした切っ掛けで人生は変わってしまうのではないだろうか。
今では、自分は何の為に生きているのだろうと考える事も無くなった。

夫がメジャーを持ち出し、娘に手伝わせて本棚を置くスペースを測っている。

ああ、やっぱり嬉しい！遂に私の本棚が置ける！
あぁ、いやいや、私達の本棚になるんだね。

完

この作品は、２０１１年１月に、ブログ「白嘘物語」に連載していた短編小説です。

お読み頂き、誠にありがとうございました。

お楽しみ頂けたら幸いです。
尚、ブログは２０１１年１２月に別のアドレスに移行しています。
新しいブログは「白嘘物語-つくもうそ物語」です。

「彼女の本棚」

著者　葉山ユタ

２０１１年1月２９日

Copyright Ｙｕｔａ　Ｈａｙａｍａ All Rights Reserved

彼女の本棚

http://p.booklog.jp/book/19364

著者：葉山ユタ

著者プロフィール：http://p.booklog.jp/users/hayamayuta/profile

発行所：ブクログのパブー（http://p.booklog.jp/**）**

運営会社：株式会社 paperboy&co.

感想はこちらのコメントへ

http://p.booklog.jp/book/19364

ブクログのパブー本棚へ入れる

http://booklog.jp/puboo/book/19364